也、又是より上の湯には、湯壺の底より沸もあり、

中の湯　二つあり、俗に瘡湯と云、これは一切の瘡瘍の類を早く愈すゆへなり、わきて楊梅瘡を煩ふ人のみを、此湯へ入るといふの名にはあらず、中比京都の醫師賀來道節、津田幸庵は、此湯に心をよせて、此湯瘡類ばかりにあらず、諸病によろしと稱美せられしゆへに、其比湯治に來る者は、多く此湯に入しと也、されど近世後藤氏の論には、瘡疹の類も、早く愈すは宜しからず、唯新湯のよく氣血を調和し、瘡瘍のをのづからいゆるに玄く事なしといへるゆへに、新湯に入者多し、

上湯　一つなり、中の湯の上に並びてあり、これは所の者の洗足の湯に用るなり、總じて此所の者は、平常の浴にも温泉を汲でつかふゆへに、所に風呂居風呂の類希にもなし、此邊は皆下の町にて、上の町は、間に野道の民家を隔て、又一筋の町あり、下の町、温泉の左右皆客舍あり、大津屋、井筒屋、油屋、板屋など云能家十軒ばかり、その外は小家也、總じて湯島の町の能家といふは、皆下の町にあり、

〔古今和歌集九羈旅〕但馬國の湯へまかりける時に、ふたみの浦といふ所にとまりて、夕さりのかれいひたうべけるに、共にありける人々、歌よみけるついでに、よめる、

夕づく夜おぼつかなきを玉くしげ二見の浦はあけてこそみめ　ふぢはらのかねすけ

〔台記〕康治二年八月七日辛卯、參宇治、但馬湯御下向留了云々、

〔增鏡七北野の雪〕このおなじころ、安嘉門院、丹後のあまの橋立御らむじにとておはします、それより但馬のきのさきのいでゆめしにくだらせ給ふ、爲家の大納言、光成の三位など御供つかうまつらる、

〔當代記三〕慶長九年五月七日、清須下野主、但馬ヱ湯治、